

石巻赤十字病院の本部支援

4月7日～11日 医師・井 清司 さん

5月7日～14日 医師・奥本克己さん

震災直後に石巻に入った名古屋と新潟・長岡赤十字病院の救急部長から、全国の日赤の救急担当者にメールが届いた。現地に唯一残った医療機関の石巻赤十字病院では、対策本部メーリングリストが機能していた。全国の日赤病院の救急部長は連絡を取り合い、現場で支援する態勢を整えた。熊本からは井清司医師が4月7日から10日まで、奥本克己医師が5月7日から14日まで現地本部で石井GMのサポートに当たった。

石巻へは全国から救護チームが救援にやってきており、ピーク時は170チーム以上が医療活動を行っていた。そこで問題だったのは、被災地で救援を待つ人たちのもとへ、いかに効率よく救護チームを送り込むかで、病院本部の大きな仕事となっていた。

石巻赤十字病院本部のサポートは全国の救急担当者が連絡を取りあい、それぞれ都合をつけて月日を割り振り、石井GMの下に常時1～2人いるようにした。このサポートは自主的なもので、全国から30人程度が参加した。参加者は、それぞれが石巻にいた期間の状況を報告しあい、現状の認識を共有していた。



井清司医師

井医師が現地入りした時には、石巻を地域分けして救護班を配置するエリアライン制が固まっていた。この態勢は3月下旬にほぼ整っていた。4月上旬の時期は全国から常時50班前後、ピーク時60班の救護班が来ており、井医師は早速、派遣の割り振りをサポートした。2～3日の班もあれば1日だけの班もあり、3～4日おきに新しいチームにオリエンテーションを行った。テントに寝泊りして、毎日朝7時から夜の10～11時まで仕事した。石井GMのサポートなので病院内にいて、石井GM外出時も留守番。病院から出て被災地を見る暇もなかった。

災害から1カ月もたつと救護も収束に向かうものだが、石巻ではその時点でも終わりが見えず、大きな問題が次々に見えてきていた。医療ニーズは急性期のピークを過ぎていたが、一方で、慢性期の対応や介護が必要な人の対応が大きな問題となっていた。他に避難所などの衛生問題。食料はニーズを満たし始め、電力も徐々に復旧していたが、上下水道はなかなか回復しなかった。避難所によっては手洗いや物の洗浄、特にトイレの汚物処理がままならず、不衛生な状態が続いていた。

医療サービスとしては、救護班は必要な数を満たし、地元医師会も全体を把握して建て直しの計画が出てきていた。道路の復旧が進み、燃料の供給も回復し、住民の足となる公共交通も復旧していた。被害の大きかった牡鹿半島でバスの定期便が運行を始めるということで、通院が可能になるかもしれないという話があった。しかし利用は少なかったようだ。被災者は身一つで津波

から逃げ、家を流されるなどの被害にあっていて、手持ちのお金がなかった。だからバスの運賃にも事欠いており、利用したくても出来なかった。その後、地元到店舗を構えていた大手スーパーが無料の巡回バスを運行するようになる。石井GMはスーパーとの交渉も行った。

井医師が石巻に着いた4月7日の深夜、最大余震が襲った。病院の周囲には避難してくる人たちが続々と集まってきた。防災放送が声高に津波への警戒を呼びかけており、住民は心理的に怖がっていた。「余震は寝袋に入ったとたんだ。石巻赤十字病院は手際よく30分くらいでトリアージ態勢を作った。まずみんなを集めようということになり、病院から30分ほどの宿舎にいた熊本の救護班にも招集をかけた」（井医師）。避難してきた人の中に重傷者はいなかった。病院は外に大型テントを張って暖房を焚き、避難者を収容した。

余震による津波の影響はなく、大きな被害もなかった。医療機関としての対応も夜が明けてからとなり、病院へ向かっていた熊本の救護班は宿舎へ引き返した。病院に集まった避難者は徐々に少なくなり、当初100人を越えていたテントからも、明け方にはほとんどが退去していた。

奥本医師が現地入りしたのは1ヵ月後の5月7日で、全国からやってくる救護班も30班ほどに減ってきていた。それでも派遣されてくる救護班の派遣地域を決め、オリエンテーリングを行い、派遣期間中に起きてくる要望や苦情を聞いて対応し、派遣終了後には活動の総括とまとめ、派遣に対しての礼を尽くす窓口の役目を担った。また派遣元の県や医師会との電話によるやり取り、派遣された救護班の受け入れ態勢やその救護班が石巻で受け持つ地域のことなどのほか、次の派遣の依頼など、対外交渉も一手に引き受けていた。この頃になると本部支援は1人で、ほとんどが全国の日赤から交代で来ていた。



奥本克己医師

奥本医師は3月16日から22日までの急性期に、熊本からの救護班として石巻に入り、巡回診療で避難所を回った。避難所によってはライフラインの復旧が進まず、道路事情も悪かったため、時間を区切った診療。体育館や公民館に被災者が雑魚寝している状態だった。その頃が救護班のピークで170を超えるチームが石巻地区に集まっていた。

本部支援で再訪した石巻は、ピークに比べて落ち着きを取り戻しており、宿泊もビジネスホテルにへと変わっていた。救護活動は収束の時期にきており、終わらせる作業でもあった。朝から夜9～10時まで、机に向かいパソコンを操作し、エリアの日割りのスケジュールと救護班の割り振りを行う。病院から出たのは石井GMの視察に同行したときだけだった。熊本の救護班と一緒に石巻入りし、一緒に帰熊したが、現地では宿舎も違い、熊本班が毎日報告に行ったときに会っただけだった。

奥本医師は11月22日に再度、石巻入りした。石巻赤十字病院の救護本部の解散式に出席するためだ。未曾有の災害に襲われた宮城・石巻地区に、医療の面でひとつの区切りがついた。